平安初期密教彫刻をめぐる思想・実践・祈願
——承和・貞観期の王権の造像を中心に——

高橋早紀子

論文要旨

大同元年（806）に唐より帰朝した空海は即身成仏と鎮護国家を二大中心思想とする体系的な密教を請来し、嵯峨・淳和・仁明の三代に渡る天皇との深い結びつきのもとで国家仏教としての密教の基盤を築いていった。こうした密教と王権との結びつきを背景として、平安時代以降、絵画や彫刻をはじめとする密教美術が制作された。本論文で考察の対象とする承和期（834-848）および貞観期（859-877）の密教彫刻に関する研究蓄積は厚く、作風・技法・像容・制作年・願主といった基本的問題については先学により議論が尽くされてきた。一方、密教彫刻の本来の意義、すなわち思想や実践と関わる宗教的機能や現世利益的祈願と関わる社会的機能については、十分な検討がなされてきたとはいい難い。こうした密教彫刻の意義を解明するためには、美術史学のみならず仏教学・日本史学・建築史学といった関連分野の研究成果を視野に入れ、文化史という視座から密教彫刻をめぐる諸問題を考究していく必要がある。

本論文は、関連分野の研究成果を積極的に参照しつつ、承和・貞観期の密教彫刻をめぐる思想・実践・祈願について考察し、密教彫刻の宗教的機能や社会的機能を解明しようと試みたものである。本論文では、空海の密教思想の直接的影響が想定される承和期、および、幼帝の即位や〈護持〉僧の成立、宗叡の帰朝の影響が想定される貞観期が密教彫刻史上において重要な位置を占めると考え、これら承和・貞観期の造像に焦点をあてている。本論文の構成は、「序章」に続き、各論五章および付論からなる本論があり、最後に「終章」で総括・結論を述べるというものである。

「序章」では、承和・貞観期の密教彫刻に関する問題の所在を明確にし、本論文の目的を示した。第一節では、思想・実践・祈願という三つの視点から承和・貞観期の密教彫刻に関する問題の所在を示した。第一の思想という点では、空海が論じる密教美術の意義を踏まえ、密教彫刻の背景に即身成仏と鎮護国家という密教の中心思想との関連を追究すべきことを論じた。第二の実践という視点は、従来の研究において看過されてきた重要な観点といえる。密教彫刻は、本来、観法や修法における本尊であったと考えられるが、これまで実践における密教彫刻の宗教的機能についてはほとんど検証されてこ

なかった。こうした問題に対して、関連経軌の主旨・文脈や安置空間との関係を踏まえて、実践における密教彫刻の宗教的機能を考究すべきことを提言した。第三の祈願については、実践によって成就される現世利益との関わりから天皇等の「御願」の造像を再考する必要を示した。以上の問題の所在を踏まえ、第二節では本論文の構成と内容について概観した。

第一章「東寺講堂諸像における『陀羅尼集経』選定の意図――四天王像と壇場結界をめぐって――」では、一般に承和六年（839）の開眼とされる仁明天皇「御願」の東寺講堂諸像をとりあげて、四天王像の密教的意義について考察した。東寺講堂諸像中、主要十五尊の密教的意義については議論が重ねされてきたが、『陀羅尼集経』所説の像容を基本とする四天王像については奈良時代以来の伝統との関連が強調され、その密教的意義が積極的に論じられることはなかった。そこで本章では、東寺講堂における空海の『陀羅尼集経』選定の意図および『陀羅尼集経』所説の像容への付加・改変の理由について考察し、東寺講堂の全体構想のもとに四天王像の密教的意義を追究した。第一節では、『陀羅尼集経』所説の四天王と東寺講堂四天王像との異同を確認し、論点を明確にした。第二節では、空海が『陀羅尼集経』を密教経典として理解していたことを指摘し、東寺講堂における『陀羅尼集経』選定の背景に壇場結界という空海の構想があったことを明らかにした。これを踏まえ、第三節では、多聞天脚下の地天・二鬼や持国天の手勢・持物といった『陀羅尼集経』所説の像容への付加・改変の問題へと考察を進め、これらの付加・改変についても壇場結界という視点から解釈が可能であることを示した。このように、これまで積極的な解釈がなされてこなかった四天王像に壇場結界と関わる密教的意義があったことを解明し、辟除結界による病気平癒という視点から仁明天皇の「御願」との関連を論じた。

第一章の付論「新図様の毘沙門天の受容と展開――地天・二鬼の属性をめぐって――」は、第一章で着目した東寺講堂多聞天像の問題を踏まえ、九世紀の日本における新図様の毘沙門天の受容について考察したものである。この新図様の毘沙門天は一般に「兜跋毘沙門天」と総称される系統のもので、西域・中国・日本の作例に関する厚い研究蓄積がある。日本における受容という点では、中国から日本への伝播においてこの系統の毘沙門天を規定する特徴が西域的甲制から地天へと変化したことが指摘されているが、その理由は明らかにされていない。ここでは、九世紀の日本における新図様の受容の様相を踏まえて地天・二鬼の属性を追究することにより、日本で地天が重視された背景についての一解釈を提示した。第一節では、東寺講堂多聞天像の図様の成立背景を検討し、奈良時代以来の多聞天の脚下に地天・二鬼という要素が部分的にとり入れられて地天・

二鬼を伴った非西域的甲制の毘沙門天が成立したことを論じた。このことを踏まえ、地天・二鬼の属性を追究したのが第二節である。ここでは、新図様における地天が「歓喜天」と説かれることに注目し、経軌および図様の検討から、毘沙門天脚下の地天がガナパティであり、二鬼がガナパティによって教化された善きヴィナーヤカであるとの新たな解釈を提示した。以上を踏まえて、この系統の毘沙門天が日本で地天を第一の特徴として展開していった背景に除障礙神のガナパティとしての性格が関わっていたとの展望を示した。

続く第二章・第三章では、即身成仏と鎮護国家という密教の中心思想を踏まえ、実践における密教彫刻の役割や造像契機である天皇等の「御願」について追究し、承和期の密教彫刻の宗教的機能や社会的機能の究明を試みた。

第二章「観心寺如意輪観音像の機能論的考察――敬愛法を中心に――」では、空海の弟子である実恵・真紹の関与のもとで橘嘉智子の「御願」によって承和十年（843）頃に制作された観心寺如意輪観音像をとりあげた。本像については、近年、寺院制度史の見地から制作背景や制作時期に関する有力な見解が提示された。しかしながら、如意輪観音という尊格の選定理由や橘嘉智子の「御願」の内容については、なお考察の余地が残されている。そこで本章では、観心寺における如意輪観音の位置づけを追究し、造像契機である橘嘉智子の「御願」について再考を試みた。第一節では、本像の概要を確認し、制作時期と制作工房について論じた。第二節では、観心寺の創建と安置仏の尊像構成について検討し、観心寺において如意輪観音が重視されていたことに注目した。続く第三節では、図像典拠とされる『観自在菩薩如意輪瑜伽』の再検証を行い、観心寺において如意輪観音が即身成仏を果たすための五相成身観の本尊として位置づけられていた可能性を示した。さらに、空海決・実恵記『四種護摩口決』に着目して如法堂の当初の安置仏が四種護摩修法の各本尊と一致することを考証し、観心寺が四種護摩修法を行う道場として構想され、如意輪観音が四種護摩修法中の敬愛法本尊として重視されていたことを究明した。これを踏まえて、修法による現世利益という視点から橘嘉智子の「御願」について考察したのが第四節である。ここでは、橘嘉智子への灌頂授与と承和の変に注目し、その「御願」が敬愛法により成就される和合親睦であったとの解釈を提示した。

第三章「神護寺五大虚空蔵菩薩像の宗教的機能」では、空海の弟子である真済の関与のもとで仁明天皇の「御願」によって承和十二年（845）から嘉祥三年（850）頃に制作されたとみられる神護寺五大虚空蔵菩薩像をとりあげた。神護寺五大虚空蔵菩薩像については当初の像容や所依経典が検討されてきたものの、儀軌・経典の全体の文脈の中で

の五大虚空蔵菩薩の意味は未だ解明されていない。そこで本章では、図像典拠の一つとされる空海決・真済記『五部肝心記』の再検証を行い、実践における宗教的機能や造像契機である仁明天皇の「御願」の問題について考究した。第一節では、安置場所や願主、制作時期、関与した密教僧といった基礎的事項を確認した。続く第二節では、これまで看過されてきた全体の主旨や文脈を踏まえて『五部肝心記』を再検証する必要を示した。これを踏まえて第三節では、『五部肝心記』において五大虚空蔵菩薩が即身成仏を果たすための五相成身観や道場観の本尊として説かれていることを究明した。さらに第四節では、仏教学や建築史学の研究成果を踏まえて、神護寺五大虚空蔵菩薩像が「毘盧遮那宝塔」という実践の場において即身成仏を果たすための五相成身観の観法本尊としての宗教的機能を有していたことを論証した。これらを踏まえて、即身成仏―加持感応―現世利益という視点から仁明天皇の「御願」について考察したのが、第五節である。ここでは、神護寺五大虚空蔵菩薩像に期待された現世利益が国王擁護をはじめとする鎮護国家であり、これこそが仁明天皇の「御願」であったことを論じた。

以上、承和期の密教彫刻についての三章にわたる考察によって明らかになったのは、これらの密教彫刻が五相成身観や護摩修法の本尊であったこと、こうした実践によって成就される現世利益が天皇等の「御願」であったこと、当該期の密教彫刻の根底に密教の中心思想である即身成仏思想と鎮護国家思想が存在したことの三点である。要するに、承和期の密教彫刻は即身成仏と関わる宗教的機能や鎮護国家と関わる社会的機能を有していたといえ、そこに空海の密教思想の直接的影響を認めることができるのである。一方、貞観期には、こうした密教彫刻の造像をめぐる思想的状況や歴史的状況に変化がみられる。すなわち、当該期には幼帝の即位や〈護持〉僧の成立、宗叡の帰朝、神国意識の高揚といった新たな展開が認められるのである。こうした変化を踏まえ、幼帝清和天皇と〈護持〉僧真雅・宗叡との特殊な結びつきに注目して貞観期の造像を検討したのが、第四章と第五章である。

第四章「東寺西院不動明王像と宗叡」では、貞観九年（867）頃に官営工房系仏師によって制作されたとみられる東寺西院不動明王像をとりあげ、造像における宗叡の関与を追究した。宗叡の関与については、宗叡請来本に比定されていた『諸説不同記』記載の「或図」との細部における共通性を根拠とした指摘があったが、その後、「或図」を宗叡請来本とする比定が誤りであることが論証され、再考の必要が生じていた。ここでは、東寺西院不動明王像の技法・図像・所依経典について検討し、貞観七年（865）帰朝の宗叡の関与を考証した。第一節では、彩色・截金技法が新たな大陸の影響による九世紀後半以降の手法とされる点に注目し、こうした技法に宗叡帰朝の影響を認めた。続

く第二節は、図像の点から宗叡の関与を追究したものである。ここでは、東寺西院不動明王像の細部の像容が東寺西院曼荼羅不動明王像と一致することを指摘し、これらが九世紀半ばから後半頃の長安・青龍寺の法全周辺の新図様とみられることを論じた。第三節では、宗叡請来の『聖無動尊安鎮家国等法』に着目し、所依経典という点から宗叡の関与を論証した。すなわち、災異が多発した当時の歴史的状況や西院御影堂という特殊な安置場所が『聖無動尊安鎮家国等法』の内容と一致することを指摘し、東寺西院不動明王像が安鎮法本尊として制作されたことを究明した。これらを踏まえ、東寺西院不動明王像が清和天皇と宗叡との関係を背景として鎮護国家のために造像された安鎮法本尊であったと結論づけた。

第五章「東寺八幡三神像の制作背景」では、九世紀後半の作とされる東寺八幡三神像をとりあげて、貞観期における密教と王権との結びつきという視点から制作背景を考究した。東寺八幡三神像はこれまで最初期の神像彫刻として注目されてきたが、ここでは密教彫刻史における意義を再考することを試みた。第一節では、作風や技法の検討から、貞観年間頃の官営工房系仏師の制作とみられることを確認した。像容の検討からは密教僧の関与が想定され、真雅の関与を指摘する先学の説が首肯されることを述べた。続く第二節では、『東宝記』を検証し、東寺における八幡三神に皇祖神・軍神・鎮護国家神・対新羅神としての性格があったことを論じた。第三節では、幼帝清和天皇をめぐる外祖父藤原良房と〈護持〉僧真雅に関する日本史学の研究成果を踏まえ、貞観二年（860）の石清水八幡宮の創建と貞観十一年（869）の神国意識の問題に注目し、東寺八幡三神像の制作背景を次のように解釈した。すなわち、石清水八幡宮の創建にみられるような八幡大菩薩の擁護する清和朝という観念を前提としつつ、新羅兵寇への憂慮を背景とした神国意識を直接的な契機として、清和天皇・良房・真雅によって鎮護国家のために造像されたのが東寺八幡三神像であったと結論づけた。そして、こうした制作背景に貞観期の密教彫刻と共通する造像の在り方を認めうることを示した。

「終章」では、各章で論じてきた問題を総括し、承和・貞観期における密教彫刻の宗教的機能および社会的機能について以下の結論を提示した。

密教の中心思想は即身成仏と鎮護国家にあり、これら出世間的祈願である即身成仏と世間的祈願である鎮護国家を繋ぐのが実践における即身成仏―加持感応―現世利益である。密教と王権との結びつきを背景として制作された密教彫刻は本来、こうした即身成仏と鎮護国家を成就するための実践における本尊であったと考えられる。第一章・第二章・第三章で論じた承和期の密教彫刻は、こうした密教彫刻の意義を端的に示している。第一章でとりあげた東寺講堂諸像については、主要十五尊に即身成仏や鎮護国家と

の関連が論じられてきたが、こうした実践の場に求められる辟除結界された空間を創出する役割を担っていたのが四天王であったとみられる。第二章・第三章でとりあげた観心寺如意輪観音像および神護寺五大虚空蔵菩薩像は、即身成仏や鎮護国家のための実践の場に観法や修法の本尊として位置づけられる。さらに、こうした実践によって成就される現世利益が「御願」であったと解され、そこに「御願」を契機とする造像の在り方をみてとることができる。一方、第四章・第五章論じた東寺西院不動明王像と東寺八幡三神像は、幼帝清和天皇と〈護持〉僧真雅・宗叡との特殊な結びつきを背景として鎮護国家のために造像された密教彫刻と位置づけられ、そこに貞観期の新たな造像の動向を認めることができる。

以上、密教と王権との結びつきを背景とする承和・貞観期の密教彫刻が、即身成仏と鎮護国家という密教の中心思想に基づき、天皇等の現世利益的祈願を直接的契機として制作された密教実践における本尊であったことを改めて強調し、本論文の結論とした。